

# 非テ形現象・擬似テ形現象の崩壊に関する 予備的考察

—宮崎県北西部方言を対象として—

有元 光彦\*

A Preliminary Study on Destruction of NON and PSEUDO *Te*-form Phenomena  
in the Northwestern Dialects of *Miyazaki* Prefecture

ARIMOTO Mitsuhiro\*

(Received September 27, 2019)

## 1. はじめに<sup>1</sup>

本稿の主たる目的は、宮崎県北西部方言を対象とし、各方言の動詞活用形の1つであるテ形に起こる形態音韻現象（「テ形音韻現象」と呼ぶ）を記述することにある。記述対象とする宮崎県北西部方言とは、児湯郡西米良村、東臼杵郡椎葉村、西臼杵郡高千穂町方言である。

また、本稿での分析結果に基づき、有元光彦（2019）で示した全体性テ形現象の崩壊と比較しつつ、テ形音韻現象の崩壊、特に非テ形現象及び擬似テ形現象の崩壊に関する予備的考察も行う。

## 2. 理論的枠組み

本節では、本稿で利用する理論的枠組みについて述べる。本稿で記述する形態音韻現象とは、有元光彦（2007a, 2007b）等における「テ形音韻現象」を指し、次のように定義されている。

### （1）テ形音韻現象の定義：

動詞テ形において、共通語の「テ」「デ」に相当する部分が、動詞の種類によって、様々な音声で現れる形態音韻現象。

ここで言う「動詞の種類」とは語幹末分節音（stem-final segment）の違いによるものであり、（2）のように大きく3種類に分類される。<sup>2</sup> さらに、子音語幹動詞は

9種類、母音語幹動詞は2種類にそれぞれ下位分類する。

- （2） a. 子音語幹動詞：/kaw/<買う>、/tob/<飛ぶ>、/jom/<読む>、/kas/<貸す>、/kak/<書く>、/kog/<漕ぐ>、/tor/<取る>、/kat/<勝つ>、/sin/<死ぬ>など  
b. 母音語幹動詞：/mi/<見る>、/oki/<起きる>、/de/<出る>、/uke/<受ける>など  
c. 不規則語幹動詞：/i/~it/<行く>、/ki/<来る>、/s/<する>

テ形の語形成を記述する方法として、初期の生成音韻論を利用する。即ち、基底形である動詞語幹（2）とテ形接辞/te/が結合し、そこに様々な音韻ルールが適用されることによって、音声形が派生される、と考える。適用される音韻ルールは種々あるが、テ形音韻現象を司る中心的なルールは「e消去ルール」と仮定している。これは、語幹末分節音を参照して、テ形接辞/te/の/e/を消去するものであるが、方言による違いがあるため、個別的なルールと考える。それに対して、「逆行同化ルール」などは、すべての方言で適用されるため、普遍的なルールと考える（cf. 有元光彦 2007a：41）。従って、本稿ではe消去ルールを方言ごとに記述していくことによって、方言差を見出していくことになる。

\* 山口大学国際総合科学部

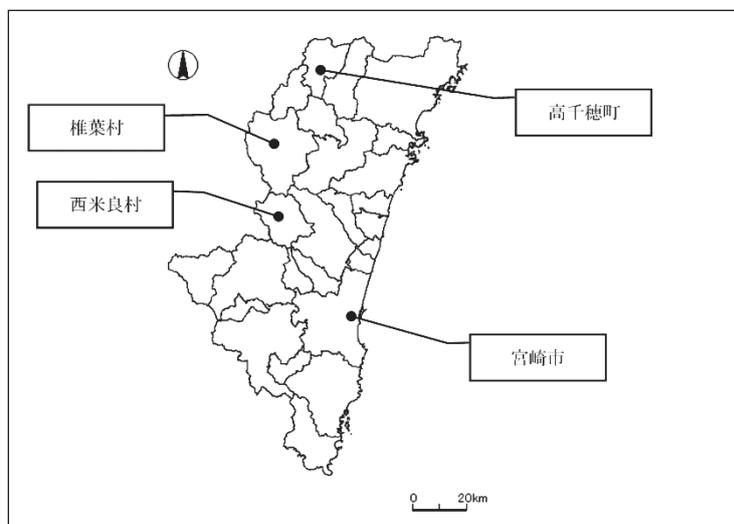
<sup>1</sup> 本研究の一部は、科学研究費・基盤研究（C）のNo. 26370540, 18K00613によるものである。調査においては、各自治体の教育委員会、及び多くのインフォーマントの方々に変なお世話になった。記して感謝する次第である。

<sup>2</sup> 不規則動詞<行く>には、方言によって/itate/のような語幹を持っている場合がある。これは [itakkita] <行ってきた>の語幹として仮定されるが、他にも/itar/、/itas/のような語幹も考え得る。今後の課題である。

### 3. 言語データについて

本稿で挙げる言語データは、2015年9月のフィールドワークによって収集されたものである。収集した地域

は、前述の3地点である。およその地理的な位置を【図1】に示す。



【図1】調査地点<sup>3</sup>

言語データは音声記号によって表記する。適格性については、各音声形の直前に以下のような記号を付けて示す。即ち、記号\*はその音声形が不適格であることを、記号?は少し違和感があることを、記号??はかなり不適格に近いことをそれぞれ表す。また、記号%はその音声形の方をよく使うとインフォーマントが判断していることを示す。音声形の直後の記号(古)は古い形である(使用しない)と、また「(少)」は少しは聞いたことがある(使用しない)と、インフォーマントがそれぞれ回答していることを示す。また、記号----は調査漏れであることを表す。

また、本稿では語幹末分節音(stem-final segment)が*a*である動詞を「*a*語幹動詞」と呼ぶ。例えば、語幹末分節音が/*k*/である動詞、/*kak*/*<書く>*は「*k*語幹動詞」と呼ぶ。「*i1*, *e1*語幹動詞」は、語幹が1音節であ

る*i*, *e*語幹動詞を、「*i2*, *e2*語幹動詞」は、語幹が2音節以上の*i*, *e*語幹動詞をそれぞれ表す(インデックス番号が付いていない場合は両方を含む)。

### 4. 分析

本節では、各方言のテ形音韻現象について、言語データを挙げつつ考察する。

#### 4. 1. 西米良村方言

本節では、西米良村方言のテ形音韻現象について記述する。まず、動詞テ形の言語データを【表1】に挙げる。なお、ここではインフォーマントを、他の節と同様「A氏」としているが、調査では5名(すべて女性、70代後半~80代前半)同時に実施している。

<sup>3</sup> 【図1】は宮崎県全域の地図である。これは、国土交通省国土政策局「国土数値情報(行政区域データ)」(<http://nlftp.mlit.go.jp/ksj/>)をもとに、筆者が地理情報分析支援システム

MANDARA 10 (<http://ktgis.net/mandara/>)を使用して編集・加工したものである。なお、宮崎市は参考地点であり、調査地点ではない。

【表1】西米良村方言の動詞テ形

語幹	A氏	意味
kaw<買う>	ko:tekita	買ってきた
	*kokkita	
tob<飛ぶ>	tondekita	飛んできた
	*toŋkita	
	*tokkita	
jom<読む>	ju:dekita	読んできた
kas<貸す>	kafitekita	貸してきた
	kja:tekita	
kak<書く>	kja:tekita	書いてきた
kog<漕ぐ>	koidekita	漕いできた
	*ko:dekita	
	*ke:dekita	
ojog<泳ぐ>	oe:dekita	泳いできた
	*oekkita	
	*oeŋkita	
tigr<取る>	tʃigittekita	取ってきた
	*tʃigikkita	
kat<勝つ>	kattekita	勝ってきた
	*kakkita	
sin<死ぬ>	ʃindekure	死んでくれ
mi<見る>	mitekita	見てきた
	*mikkita	
	*mittekita	
oki<起きる>	okitekita	起きてきた
	*okikkita	
	okittekita	
de<出る>	detekita	出てきた
	*dekkita	
	*dettekita	
uke<受ける>	uketekita	受けてきた
	*ukekkita	
	*ukettekita	
i~it~itate<行く>	itekita	行ってきた
	*ikkita	
	itattekita	
	*itakkita	
ki<来る>	kitekureja	来てくれ
	*kittekure	
	*kikkure	
s<する>	ʃitekita	してきた
	*ʃikkita	
	*sekkita	

【表1】から共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声を抜き出すと、次のような分布をしている。

【表2】西米良村方言における「テ」「デ」に相当する部分の音声

語幹末 分節音	A氏
w	te
b	de
m	de
s	te
k	te
g	de
r	te
t	te
n	de
i <sub>1</sub>	te
i <sub>2</sub>	te
e <sub>1</sub>	te
e <sub>2</sub>	te
it	te, itaQ
ki	te
s/se	te

また、母音語幹動詞の語幹末分節音を設定するために、否定形・過去形を【表3】に挙げる。

【表3】西米良村方言の一段動詞の否定形・過去形

	A氏	
	否定形	過去形
見る	*min	mita
	miran	*mitta
起きる	*okin	okita
	okiran	okitta
出る	*den	deta
	deran	*detta
受ける	uken	uketa
	*ukeran	*uketta

【表3】から、i1, i2, e1語幹動詞ではr語幹化しており、e2語幹動詞ではしていないことが分かる。しかし、r語幹化の有無は、方言タイプを仮定する議論には影響を与えない。即ち、【表2】では、すべての種類の動詞において[te], [de]が現れているため、西米良村方言の方言タイプは次のように設定できる。

(3) A氏：非テ形現象方言（タイプN1方言）

4. 2. 椎葉村方言

本節では、椎葉村方言のテ形音韻現象について記述する。まず、動詞テ形の言語データを【表4】に挙げる。A氏は80代・男性、B氏は80代・女性である。

【表4】から共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声を抜き出すと、次のような分布をしている。

【表5】椎葉村方言における「テ」「デ」に相当する部分の音声

語幹末 分節音	A氏	B氏
w	te	te
b	de	de
m	de	de
s	te	te
k	te	te
g	de	de
r	te	te
t	te	te
n	de	de
i <sub>1</sub>	te	te
i <sub>2</sub>	te	te
e <sub>1</sub>	te	te
e <sub>2</sub>	te	te
it	te	te
ki	te	te
s/se	te	te

また、母音語幹動詞の語幹末分節音を設定するために、否定形・過去形を【表6】に挙げる。

【表6】椎葉村方言の一段動詞の否定形・過去形

	A氏		B氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	min	mita	min	mita
	miran	*mitta	miran	*mitta
起きる	okin	okita	okin	okita
	okiran	*okitta	okiran	*okitta
		*oketa		
出る	*den	deta	den	deta
	deran	*detta	deran	*detta
受ける	uken	uketa	uken	uketa
	*ukeran	*uketta	*ukeran	*uketta

【表4】椎葉村方言の動詞テ形

語幹	A氏	B氏	意味
kaw<買う>	ko:tekita	ko:tekita	買った
	*kokkita	*kokkita	
	*ko:ɸjikita	*ko:ɸjikita	
tob<飛ぶ>	tondekita	to:dekita	飛んできた
	*toɲkita	*tokkita	
	*tokkita	*toɲkita	
jom<読む>	jondekita	jo:dekita	読んできた
	*joɲkita	*joɲkita	
		*jokkita	
kas<貸す>	kafitekita	kafitekita	貸してきた
	*kja:tekita	*kakkita	
	*kakkita	*kasekkita	
	*kekkita		
	*kafikkita		
kak<書く>	kaitekita	kø:tekita	書いてきた
	*kja:tekita	*kakkita	
	*kekkita	*kekkita	
kog<漕ぐ>	koidekita		漕いできた
	*koɲkita	-----	
	*kekkita		
ojog<泳ぐ>	ojoidekita	oe:dekita	泳いできた
	*oedekita	*oekkita	
	*ojokkita		
	*oekkita		
tor<取る>	tottekita	tottekita	取ってきた
	*tokkita	*tokkita	
tigr<千切る>	-----	ɸjigittekita	千切ってきた
		*ɸjigikkita	
kat<勝つ>	kattekita	kattekita	勝ってきた
		*kakkita	
sin<死ぬ>	ɸindekure	ɸindekure	死んでくれ
	*ɸiɲkure	*ɸiɲkure	
mi<見る>	mitekita	mitekita	見てきた
	*mikkita	*mikkita	
	*mittekita	*mittekita	
oki<起きる>	okitekita	okitekita	起きてきた
	*okikkita	*okikkita	
	*okittekita	*okittekita	
de<出る>	detekita	detekita	出てきた
	*dekkita	*dekkita	
	*dettekita	*dettekita	
uke<受ける>	uketekita	uketekita	受けてきた
	*ukekkita	*ukekkita	
	*ukettekita	*ukettekita	
i~it~itate<行く>	ittekita	itekita	行ってきた
	itekita	*ikkita	
	*ikkita	*itakkita	
	*itakkita		
	*itatekita		
ki<来る>	kitekurenne	kitekure	来てくれ
	*kikkure	*kikkure	
s<する>	ɸitekita	ɸitekita	してきた
	*ɸikkita	*ɸikkita	
	*sekkita	*sekkita	

【表6】から、i1, i2, e1語幹動詞はr語幹化をしており、e2語幹動詞はしていないことが分かる。ここでも、r語幹化の有無は方言タイプの仮定の議論には影響を与えない。即ち、【表5】では、すべての種類の動詞において[te], [de]が現れており、しかも個人差はないため、椎葉村方言の方言タイプは次のように設定できる。

(4) A, B氏：非テ形現象方言（タイプN1方言）

#### 4. 3. 高千穂町方言

本節では、高千穂町方言のテ形音韻現象について記述する。まず、動詞テ形の言語データを【表7】に挙げる。A氏は70代・女性、B氏は70代・男性である。

【表7】から共通語の「テ」「デ」に相当する部分の音声を抜き出すと、次のような分布をしている。

【表8】高千穂町方言における「テ」「デ」に相当する部分の音声

語幹末 分節音	A氏	B氏
w	ʧi	ʧi
b	ɕi	ɕi
m	ɕi	de
s	te, ʧi	te
k	ʧi	te
g	de	de
r	ʧi	te
t	ʧi	te
n	ɕi	de
i <sub>1</sub>	ʧi	te
i <sub>2</sub>	ʧi	te
e <sub>1</sub>	ʧi	te
e <sub>2</sub>	ʧi	te
it	ʧi	te
ki	te	te
s/se	ʧi	te

また、母音語幹動詞の語幹末分節音を設定するために、否定形・過去形を【表9】に挙げる。

【表9】高千穂町方言の一段動詞の否定形・過去形

	A氏		B氏	
	否定形	過去形	否定形	過去形
見る	*min	mita	min	mita
	miran	*mitta	%miran	*mitta
起きる	ʔʔokin	okita	okin	okita
	okiran	okitta	%okiran	*okitta
出る	den	deta	den	deta
	deran	*detta	deran	*detta
受ける	uken	uketa	uken	uketa
	*ukeran	*uketta	*ukeran	*uketta

【表9】より、i1, i2, e1語幹動詞はr語幹化をしており、e2語幹動詞はしていないことが分かる。ここでも、r語幹化の有無は方言タイプの仮定の議論に影響を与えない。

【表8】を見ると、まずA氏ではほぼすべての種類の動詞において[ʧi], [ɕi]が現れている。従って、基本的には「非テ形現象方言（タイプN2方言）」である。しかし、s, g語幹動詞では[te], [de]が現れている。これは「非テ形現象方言（タイプN1方言）」の影響かと考えられるが、定かではない。

一方、B氏ではw, b語幹動詞にのみ[ʧi], [ɕi]が現れている。これは、すでに「擬似テ形現象方言（タイプPD'''方言）」として仮定しているものである（cf. 有元光彦 2018: 118）。

以上より、高千穂町方言は次のように設定できる。

- (5) a. A氏：非テ形現象方言（タイプN2方言）  
b. B氏：擬似テ形現象方言（タイプPD'''方言）

#### 5. 方言タイプの地理的分布

本稿で取り上げた方言タイプをまとめて挙げると、次のようになる。

- (6) a. 西米良村（A氏）：非テ形現象（タイプN1）方言  
b. 椎葉村（A, B氏）：非テ形現象（タイプN1）方言  
c. 高千穂町（A氏）：非テ形現象（タイプN2）方言  
d. 高千穂町（B氏）：擬似テ形現象（タイプPD'''）方言

【表7】高千穂町方言の動詞テ形

語幹	A氏	B氏	意味
kaw<買う>	ko:tekita	ko:tekita	買った
	*kokkita	*kokkita	
	ko:ɸikita	ko:ɸikita	
tob<飛ぶ>	tondekita	tsu:ɸikita	飛んできた
	*toɸkita		
	*tokkita		
	tonɸikita		
jom<読む>	jondekita	jondekita	読んできた
	*joɸkita	*jo:dekita	
	jonɸikita (古)	*jonɸikita	
kas<貸す>	kafitekita	kafitekita	貸してきた
	*kakkita	*kakkita	
	*kekkitita	*kasekkita	
	*kasekkita	*kafjɸikita	
?kafjɸikita			
	kaitekita	ke:tekita	書いてきた
	*kakkita	*kakkita	
	kaiɸikita	*kekkitita	
	*ke:ɸikita		
kog<漕ぐ>	koidekita	koidekita	漕いできた
	*koɸkita	*kedekita	
	*koiɸikita	*kokkita	
		*koɸkita	
*koiɸikita			
		*koiɸikita	
ojog<泳ぐ>	ojoidekita	ojoidekita	泳いできた
	ojo:ɸikita (古)	*oedekita	
		*ojoɸikita	
tor<取る>	totɸikita	tottekita	取ってきた
		*tokkita	
		*totɸikita	
kat<勝つ>	kattɸikita	kattekita	勝ってきた
		*kakkita	
		*kattɸikita	
sin<死ぬ>	jindekurenka	jindekuri:	死んでくれ
	jindɸikurenka (古)	*jɸnkuri:	
		*jindɸikuri:	
mi<見る>	mittekita	mittekita	見てきた
	*mikkita	*mikkita	
	*mittekita	*mittekita	
	miɸikita	*miɸikita	
oki<起きる>	okitekita	okitekita	起きてきた
	*okikkita	*okikkita	
	okiɸikita	okittekita	
		*okiɸikita	
de<出る>	detekita	detekita	出てきた
	*dekkita	*dekkita	
	deɸikita	*dettekita	
		*deɸikita	
uke<受ける>	*ukekkita	uketekita	受けてきた
	ukeɸikita	*ukekkita	
		*ukettekita	
		*ukeɸikita	
i~it~itate<行く>	itekita	itekita	行ってきた
	*ikkita	*ikkita	
	*itakkita	*itakkita	
	iɸikita	*iɸikita	
ki<来る>	kitekurenne	kitekuri:	来てくれ
	*kiɸikurenne	*kikkuri:	
		*kiɸikuri:	
s<する>	jitekita	jitekita	してきた
	*jikkita	*jikkita	
	*sekkita	*sekkita	
	ɸjɸikita	*ɸjɸikita	

ここで、九州全体におけるテ形音韻現象の方言タイプの分布を挙げる。言語地図の最新版は、有元光彦(2019:341)であり、これに本稿で解明した方言タイプ(白文字の箇所)をプロットすると【図2】になる。

【図2】にプロットされている方言タイプの記号は、有元光彦(2018:117-119)を使用している。記号/は、話者によって異なる方言タイプを示している。記号=は、共生タイプであることを示す(cf. 有元光彦2015b)。

(6), 【図2】から分かるように、西米良村方言、椎葉村方言においては方言タイプに揺れは見られない。地理的にも、タイプN1方言は、近隣の熊本県人吉市、熊本県球磨郡五木村方言と同じ方言タイプである(cf. 有元光彦2011)。高千穂町方言のタイプN2方言も近隣の大分県日田市上津江町方言や宮崎県南部と同じである(cf. 有元光彦2013, 2019)。タイプPD''方言は、熊本県阿蘇郡高森町、大分県日田市上津江町方言と同じであり、やはり近隣に分布している(cf. 有元光彦2013)。

## 6. テ形音韻現象の崩壊

本節では、有元光彦(2019)で扱った全体性テ形現象の崩壊と比較しつつ、非テ形現象及び擬似テ形現象の崩壊を分析していく。

### 6. 1. 全体性テ形現象の崩壊

まず、全体性テ形現象の崩壊について記述した有元光彦(2019)を振り返っておく。有元光彦(2019:342)では、タイプW1方言からタイプW2方言への通時的変化を仮定し、そこで「[-lab, -cor]→[+cor]→[+lab]の順に崩壊が進行する」と記述されている。まず、この素性指定は正確ではないため、次のように修正したうえで、改めて全体性テ形現象の崩壊について仮定しておく。

(7) 全体性テ形現象の崩壊:

タイプW1方言からタイプW2方言への通時的変化においては、{[+back], [+cor, +cont]}→[+cor, -cont]→[+lab]の順に崩壊が進行する。

ここで注意したいことがある。それは、ここで言う「崩壊」とは、「テ形音韻現象を司るコアールの適用範囲が狭くなる」ことを指している、ということである。いわば、「非テ形現象化」のことである(cf. 有元光彦2007, 2015)。しかも、有元光彦(2019)で、(7)を通時的変化と仮定したのは、(8)の仮説が前提としてあるからである。

(8) テ形音韻現象は、それを司るコアールの適用範囲が狭くなる方向へと通時的に変化する。

純粹に言語データから観察できることは、どの方言がどの程度テ形音韻現象を相対的に保持しているかという共時態である。崩壊という通時的変化と捉えるためには、(8)の前提が不可欠となる。

### 6. 2. 非テ形現象の崩壊

(8)を前提仮説としたうえで、高千穂町(A氏)方言の【表8】を見ると、s, g語幹動詞にそれぞれ[te], [de]が現れている。語幹末子音/s, g/は(7)の{[+back], [+cor, +cont]}に相当するため、非テ形現象にも全体性テ形現象の崩壊と同じ変化が起きていると言えるかもしれない。暫定的に(9)を仮定する。

(9) 非テ形現象の崩壊:

タイプN2方言からタイプN1方言への通時的変化においては、{[+back], [+cor, +cont]}→[+cor, -cont]→[+lab]の順に崩壊が進行する。

もちろん、ここでは(9)の最初の矢印の段階しか観察されていないので、それ以降の変化が起ころのかどうかは不明である。今後検証していくしかない。

### 6. 3. 擬似テ形現象の崩壊

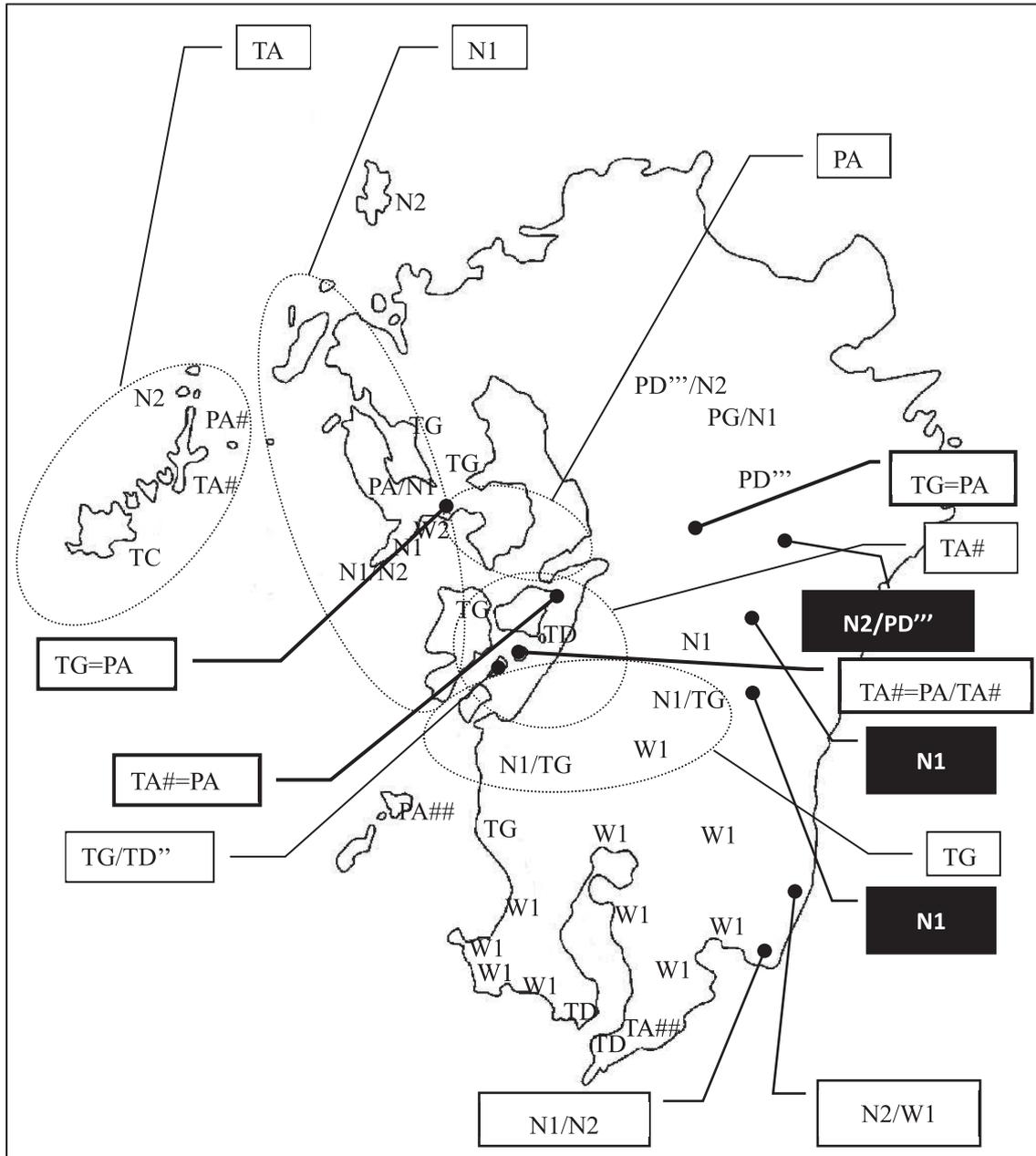
次に、高千穂町(B氏)方言を見てみると、(5b)のように「擬似テ形現象方言(タイプPD''方言)」と設定されている。現在までの研究では、確かに1つの方言タイプとして設定されているが、これも「擬似テ形現象の崩壊」と考えることはできないだろうか。そうであるとする、w, b語幹動詞だけが最後まで擬似テ形現象を保持していると言えよう。/w, b/は[+lab]なので、全体性テ形現象の崩壊の場合と同様に説明できることになる。そして、(10)のように仮定できる。

(10) 擬似テ形現象の崩壊:

タイプPD''方言への通時的変化においては、{[+back], [+cor, +cont]}→[+cor, -cont]→[+lab]の順に崩壊が進行する。

ここでは、通時的変化の出発点を明記していない。これは、高千穂町(B氏)方言において[+lab]の語幹末分節音を持つ動詞だけが擬似テ形現象を保持しているため、それが(10)の最後の矢印の段階に相当するのではないかと判断しているからである。現時点では、通時的変化の一部しか観察できていないため、仮説としての資格も

非常に弱い。擬似テ形現象方言全体を照査する必要があるだろう。



【図2】テ形音韻現象の地理的分布

しかし、ここでの議論は、「どこまでを方言タイプと  
考え、どこまでを崩壊したものと考えるのか」という問  
題を提起してくれる。今まで方言タイプと考えていた  
ものが、単に崩壊の途中の1つのプロセスに過ぎないも  
のかもしれないのである。そう考えていくと、そもそも  
「崩壊とはどのような現象なのか」といった根本的な問  
題にまで至る。これらの問題については別稿に譲るが、  
少なくとも「全体性テ形現象、非テ形現象、擬似テ形現  
象において同様の崩壊が起こっている」と仮定すること  
はできるだろう。

## 7. おわりに

本稿では、宮崎県北西部方言のテ形音韻現象について  
記述し、その分析結果に基づいて、全体性テ形現象、非  
テ形現象、擬似テ形現象の崩壊プロセスについて議論し  
た。その結果、同様の崩壊プロセスを仮定することがで  
きた。残るは真性テ形現象だけであるが、もしここに同  
様の崩壊プロセスが観察された場合には、「非テ形現象  
化」を見直す必要性が生じる。それに伴って、現在まで  
に仮定していた方言タイプについても根本的な見直し  
が迫られる。

また、有元光彦(2019)に記述のあった、串間市  
(A氏)方言のg語幹動詞、日南市(A氏)方言のm語  
幹動詞にも注目すべきである。前者の[ojokkita]<泳い  
できた>は「少しは聞いたことがある(使用しない)」  
もの、後者の[jonkita]<読んできた>は「少し違和感  
がある」ものと、インフォーマントがそれぞれ判断してい  
る。この微妙な適格性の判断を捨てるのか、あるいは捨  
うとしたらどのように理論に組み込んでいくか、という  
問題も残っている。

崩壊プロセスは、体系的変化と個別的变化の中間にあ  
るようなものである。一般的に、体系的変化はルール化  
可能であるが、個別的变化は不可能である。果たしてこ  
れらの中間の変化はルール化可能かどうか、言語デー  
タ一つ一つを慎重に検討していく必要がある。

## 【参考文献】

- 有元光彦(2007a)『九州西部方言動詞テ形における形  
態音韻現象の研究』ひつじ書房。  
有元光彦(2007b)『方言研究の構成的アプローチの試  
み—九州方言の動詞テ形・タ形における形態音韻現  
象—』平成16~18年度独立行政法人日本学術振興会  
科学研究費・基盤研究(C)(2)「九州方言にお  
ける音便現象とテ形現象の“棲み分け”に関する研究」  
(No.16520281)研究成果報告書。  
有元光彦(2011)「熊本県本土南部・鹿児島県本土北  
西部方言の動詞テ形における形態音韻現象」『研究論

- 叢(山口大学教育学部)』第60巻・第1部, pp.25-38.  
有元光彦(2013)「タイプPD””, PG方言の発見—熊本  
県北東部・大分県中西部方言の動詞テ形における形態  
音韻現象—」『研究論叢(山口大学教育学部)』第62  
巻・第1部, pp.37-55.  
有元光彦(2015a)「タイプW1方言と方言崩壊—九州  
南部方言における動詞テ形音韻現象—」『九州大学  
言語学論集』第35号(言語学研究室創立50周年記念  
号), pp.299-328.  
有元光彦(2015b)「共生タイプについて—九州西部方  
言の動詞におけるテ形音韻現象を対象として—」『方  
言の研究』第1号, 日本方言研究会編, pp.185-208.  
有元光彦(2018)『九州方言におけるテ形音韻現象の  
記述的研究』平成26~29年度科学研究費・基盤研究  
(C)「九州方言音韻現象の方言崩壊ヒストリーに基  
づく方言形成シナリオの構築」(No.26370540)・研  
究成果報告書。  
有元光彦(2019)「テ形音韻現象の崩壊に関する議論  
—宮崎県南部方言を対象として—」『研究論叢(山口  
大学教育学部)』第68巻, pp.335-343.  
Chomsky, N. & M. Halle (1968) *The Sound Pattern of  
English*, Harper & Row.  
Kenstowicz, M. (1994) *Phonology in Generative  
Grammar*, Blackwell Publishers.